第106回『わかるように伝えていますか』

香川大学　坂井　聡

これらの実践から

小学校と高等学校での事例について紹介してきました。インクルーシブ教育にICTを導入したこれらの実践からわかることは、環境調整という視点から考えると次の三点です。それは、教師の視点、周囲の理解、制度の設計の3点です。

一つ目は、教師の視点について考えてみます。いずれの事例も、児童生徒が本当の力を発揮するためにはどのような支援が必要なのかを考えていました。多くの場合、子どもの発達による課題解決を期待して、様子を見るという方法をとることが多いと思われます。しかし、様子を見ている間の学習の保障はどうするのでしょうか？教師が柔軟に子どもたちの困っていることに視点を当てて、今の力で解決できることを提案していくことがとても重要で、そのことによって子どもは自分の力でできる。これがあれば大丈夫と感じるのではないかと思います。自己肯定感を育てるうえでもとても重要なことだと思います。

二点目は周囲の理解です。ICTの導入がインクルーシブ教育に効果があるということはわかっているのです。しかし、クラスの子どもたちや保護者、周囲の教員が理解しなければそれは実現しないのではないかと思います。今回の事例は、教員もクラスの児童も保護者も共通理解が図れたことにより成功したものと考えられるのです。教師集団がまず、児童生徒の気質、そして合理的配慮について理解することが、クラスの子どもたちの理解につながるのだと考えられます。寛容な目で児童生徒を見ることができるような教師の感覚と、困っている仲間がいたら助けて良いと考える周囲の子ども。まさしくインクルーシブ教育を考える際に、教育が問われているところではないかと思います。

最後に制度の設計についてです。小学校で実施していた配慮が中学校に、そして、中学校で行われていた配慮が高校入試とその後の学習に、そして大学入試にとつなげていくことはとても重要なことです。しかし、接続のところで機能しないという事例を聞くことは多いのです。子どものセルフエスティームを高く保って、大人にしていくということは、これからの大きな課題であると考えられます。成功体験を引き継ぐことができるようなシステムの制度設計が必要であるということなのです。そこで活用できるのが、個別の指導計画と個別の教育支援計画です。具体的な配慮について、これらにきちんと書き込むことができるようにすることが、一つの解決策なのではないかと考えられます。合理的な配慮が求められる今、インクルーシブ教育を考える視点でも特に重要なこととなると考えます。

おわりに

小学校での実践、高等学校での実践を紹介し、インクルーシブ教育とICTの導入について考えてきました。ICT導入の効果と課題を少し明らかにすることができたのではないかと考えています。ここで紹介した事例は、どの学校でも先生方のアイデア次第で取り組めるものであると思います。学校で、児童生徒が笑顔で入学し、笑顔で卒業することができるように、取り組みを進めていきたいものです。

参考文献等
インクルーシブ教育システム構築事業文部科学省　平成27年
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/other/detail/__icsFiles/afieldfile/2015/06/16/1358945_02.pdf
教育の情報化ビジョン　文部科学省　2011

～坂井聡先生の紹介～

((プロフィール))

香川大学教育学部卒業　金沢大学大学院教育学研究科修了、香川大学教育学部附属養護学校など養護学校教諭を経て、現在香川大学教育学部障害児教育コース准教授。 1997年には自閉症のコミュニケーション指導で辻村奨励賞受賞。2013年より教授に就任。

((著書))

暮らしの中のコミュニケーション（やまびこの里）、クラスルームコミュニケーション（こころリース出版社）、
自閉症や知的障害をもつ人とのコミュニケーションのための10のアイデア（エンパワメント研究所）など